



教皇様の聲

4

240号

Libreria Editrice Vaticana, Citta
del Vaticanoの転載許可済 2000

神と隣人との和解

〔全教会は祈りで罪人との対話に協力し、忠告や矯正、和解することで強い一致を示す。〕

1 赦しの秘跡について考えて来ましたが、今日は赦しの秘跡の本質的な特徴の一つである和解について見て行きましょう。赦しの秘跡に関係する和解は、破壊的な罪の本質に対して解毒剤または治療法の役割を果たします。罪を犯すと、人間は神から離れるだけでなく、自分自身のうちに、そして隣人と自分との間にも分裂の種をまきます。神に立ち返る過程には、罪によって危険にさらされた一致を回復することも当然含まれます。

2 和解は御父からの賜物です。御父だけが和解させる力をお持ちです。だからこそ神が和解をお呼びかけになります。「キリストの御名においてお願いします。神と和解させていただきなさい。」(2コリント5・20) イエスが放蕩息子の話で説明しているように(ルカ15・11~32参照)、人々を赦し、ご自分と和解させることは祝いです。他の福音書の節と同様、この箇所では、御父の赦しと和解が示されるだけでなく、赦しと和解が人々にとって喜びの源であることも示されます。

新約聖書の中では、神の父性と祝宴を祝う喜びとの間に重要なつながりがあります。神の国は喜びの祝宴にたとえられますが、そこでの主人は実に神ご自身です。(マタイ8・11、22・4、26・29参照) 救いの歴史の実現は、小羊の婚礼のために神である御父が用意なさった祝宴にたとえて示されます。(黙示録19・6~9参照)

3 神から来る和解は、キリストご自身に集中します。キリストは、人間の罪のために捧げられた汚れのない小羊です。(1ペトロ1・19、黙示録5・6、12・11) イエス・キリストは和解を実現する方というだけでなく和解そのものでもあります。聖パウロが言うように、私たちは聖霊によって新しく創造された者となります。「これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」(2コリント5・18~19)

確かに十字架の秘義を通して、神であるイエス・キリストは人間と神との間の悲しむべき分裂を克服してくださいました。実に、復活をもって、御父の無限の慈しみが人間の悪の暗黒の根元までしみ通ります。私たちが自由に同意するなら、恩恵の動きが始まり、完全に和解する喜びを味わうことができます。

キリストの測り知れない苦しみや自己放棄は、憐れみ深い和解の愛への尽きることのない源となりました。贖い主は御父への道を再びたどり、失われた父子関係に再びあずかることを可能にし、神との深い一致を保つために必要な力を人間にお与えになりました。

4 残念ながら、救われた存在であっても再び罪を犯し得る私たちですから、このことから常に警戒している必要があります。更に、赦しを受けた後も「罪の残留物」が残っているため、それを取り除き、一層善行に励むことを含めて、償いを果たすことによってそれを取り除き罪が残したものと戦わなければなりません。まず初めに、個人や集団に及ぼした身体的精神的過ちを償うことが求められます。こうして改心は絶え間ない歩みとなり、秘跡に現われる和解の秘義は、旅路の終わりであり出発点となります。

赦してくださるキリストと出会うことによって、私たちの心に三位一体への強い愛が増していきます。赦しの秘跡の式次第では次のように示されています。「赦しの秘跡では、御父が、悔い改めて自分のもとに立ち戻る子供を受け入れ、キリストは見失っていた羊を肩にのせて羊小屋まで連れて帰り、聖霊は神の神殿である人々を再び清め聖化し、そこで一層深い仕方でお住まいになります。これが実現するのが主の食卓にあずかることにおいてですが、それがより強く再開されるのです。遠くから戻って来る子供は、神の教会の祝宴に喜びをもたらします。」(5、6、19番参照)

5 赦しの式文の中で「赦しの秘跡の儀式」は赦しと平和の関係を示しています。赦しと平和は父である神によって御子の死と復活において、ま

た「教会の秘義」の仲介によって与えられるものです。（「赦しの秘跡式次第」46番参照）赦しの秘跡は和解の賜物を示し、それを与えます。同時に、父である神とだけでなく兄弟姉妹とも和解したことをはっきり示してくれます。これら和解についての二つの側面は相互に密接に関わっています。キリストの和解の働きは教会内で実現します。教会は主のはっきりした命令に基づいて、キリストの赦しの生きる道具としてのみ、教会は人々に和解をもたらすことができます。（ヨハネ20・23、マタイ18・18参照）このキリストにおける和解は、赦しの秘跡において特に目立った形で実現します。しかし、共同体として見た教会は常に、永続的な和解へ向かう心構えを必要とします。

一部の人々が抱く利己的な和解についての考えを克服することが必要です。全教会は祈り、忠告、兄弟としての戒め、愛徳によって罪人の改心のために協力します。兄弟姉妹と和解しなければ、愛がその人の中で生きることはないでしょう。ちょうど罪がキリストの体を傷つけるように、和解によって神の

民の間に再び一致がもたらされます。

6 古代の償いの行為は和解の持つ教会的共同体的側面に明るい光を当て、特に赦しの最後の瞬間、司教が悔い改めた者を再び共同体に受け入れる時を強調していました。第二バチカン公会議後に公布された教会の教えや悔い改めの規律は、教会の共同体的側面である和解を再発見し再び尊重するよう促します。（教会憲章11番、典礼憲章27番参照）同時に、個人的な告白が必要であるという教えを維持していかなくてはなりません。


大聖年を迎えた今年、効果的で最も新しい和解への道を示すことが大切です。道を示されることによって、共同体的側面である償い、そして人類の救いに対する御父の全計画を再発見することができるでしょう。こうして教会憲章が実践に移されます。「神は人々を個別的に、全く相互の連絡なしに聖化し救うのではなく、かれらを、真理に基づいて神を認め忠実に神に仕える一つの民として確立することを望んだ。」（9番）

（1999.9.22）

仲介者、啓示の完成であるキリスト

〔教皇様はローマでの総会を終えた教理省を謁見なさり、唯一普遍的贖い主キリストについて話された。〕

(…)

 この会議で話し合われた主な論題について少し考えてみたいと思います。皆さんは、キリストと教会の唯一性や救いに関する普遍性を研究するために今がふさわしいときでありまたその必要があるとも考えています。これらの点に関する教会の教えを再確認しようと提示されていますが、それは、「キリストの栄光に関する福音の光」（2コリント4・4）を世に示し、様々なグループ内で現われ、広がっている深刻な間違いやあいまいさを正すためでもあります。


ここ数年、ある考え方が神学や教会の各種グループに生まれています。それはキリストの啓示、救いをもたらす仲介の唯一性と普遍性を相対化しようとするだけでなく、救いの普遍的秘跡であるキリストの教会を必ずしも絶対視しないという方向に向かっています。

教会は神が明らかにした真理の充満を宣言する

この相対的な考え方に対処するためには、最終的に完全な性質を持つ教会の啓示を、まず初めに強調しなければなりません。神の御言葉に忠実を保つように第二バチカン公会議は教えます。「この啓示が示す神と人間の救いに関する深遠な真理は、仲介者であり、同時に全啓示の充満であるキリストにおい

てわれわれに現われている。」（「神の啓示に関する教令」2番）

このため、回勅「救い主の使命」で、真理の充満である福音を宣言することが教会の義務であることを思い起こしました。「神はその決定的な啓示であるみことばにおいて、人間がもっとも完全な方法で神ご自身を知ることができるようにしてくださいました。神は人間に、ご自分をはっきりとお示しになったのです。神のこの決定的な自己啓示こそが、教会が本質的に宣教者であるということの根本的な理由なのです。教会は、福音を告げ知らせずにはいられません。福音こそ、神がわたしたちにご自分を知らせることのできる真理に満ちたものだからです。」（5番）

 キリストの啓示には限界があり、足りない部分は他の宗教に見い出されるという考えは、教会の信仰に反するものです。この主張の根底には、歴史上のいかなる宗教も、キリスト教やイエス・キリストでさえも、神の真理の全体性や完全性を理解し表すことはできないという考え方があります。けれどもこの立場は、神の救いの秘義は最高に完全な啓示であり、その啓示はイエス・キリストにおいて与えられるという信仰の証言と相反するものです。この無限の神秘を理解するには、教会の時代に私たちを導き「真理をことごとく悟らせ」（ヨハネ16・13）霊の光に照らされて探求し深める努力が要求されます。

イエスの言葉、行ない、そしてイエスに関する全て

の歴史的な出来事は人間的な現実としての限界があります。しかし、その源に託身の御言葉の聖なるペルソナを所有していますから、イエスの言葉や行ないには、救いの方法や神の秘義に関する絶対的に完全な啓示が含まれているのです。神に関する真理は、人間の言葉で表されているとは言え、値打ちがなくなったり役に立たなくなったりすることはありません。それどころか、十分に完全な一つのものとして残っています。話したり行動したりするのは、託身なされた神の御一人子だからです。

人間の宗教生活の充満が


キリストの内に見出される

(….) 主イエスは、救いをもたらす現実・自らの体として教会を作り、その教会を通してご自身が歴史における救いを成し遂げることになさいました。救い主がただお一人であるように、その御体も一つしかありません。「一、聖、公、使徒継承の教会」(「信仰宣言」DS48参照)第二バチカン公会議は、「聖書と伝承に基づいて、この地上を旅する教会が救いのために必要であると教える」(「教会憲章」14番)と言っています。

以上のことから、教会は他の宗教と同じく多くの救いの道の一つにすぎず、他の宗教の助けを借りなければ目的を達することができないという考えは、明らかに間違っていることがわかるでしょう。たとえその宗教が、終末論的な神の王国について教会と意見を一致させるとしても、教会の足りない部分を補うもののように見なしてはいけません。した

がって、「『どの宗教でもよい』という信念に導く宗教的相対主義」を特徴とする無関心主義は退けなければなりません。(「救い主の使命」36番参照)

第二バチカン公会議が思い出させているように、キリスト者でない人も「誠実な心をもって神を探し求め」(「教会憲章」16番)るなら、永遠の生命に「達する」ことができることは事実です。けれども、真剣に真実の神を捜し求めている人はキリストとその御体つまり教会に「関わって」いるのです。(同上)それにもかかわらず、そのような人々は、教会にいて救いのための十分な手段を持っている人々と比べて、自分が満たされた状態にいないことがわかるでしょう。(….)

 回勅「キリスト者の一致」で、カトリック教会の「一致の回復」に対する責任を厳粛に確認しました。これは第二バチカン公会議が強く望んでいた教会一致という目標につながるものです。(….)

他の教会や教会共同体と完全に一致したいという熱烈な思いを非現実的で実現不可能な願いのようにみなすべきではありません。また、今日のようにばらばらに分かれた状態を脱して一つに再建される日の来ることを、単なる夢のように考えるべきでもありません。第二バチカン公会議文書「エキュメニズムに関する教令」は一致についてははっきりと述べました。「われわれはそれが不滅のものとしてカトリック教会の中に存続していることを信じ、世の終わりまで日増しに成長していくことを希望する。」(4番)(….)

(2000.1.28)

障害児は健常児と同等の権利を持つ

〔教皇様は『家庭について』『障害を持つ児童・少年に対する差別撤廃』に関する会議参加者にお話しになった。〕

1 (省略)

問題を抱える家庭には助けを受ける権利がある

2 苦しみを背負った子供の誕生は、きっと家族に動揺をもたらす大変なショックを与えることになるでしょう。この点を考えてみても、両親の深い愛情を励ますのは大切なことです。「子どもの人格の尊厳を高く評価し、その権利を十分に尊重し、惜しめない配慮をして、子どもに特別な注意を払わなければなりません。このことは、すべての子どもにあてはまる真理です。しかし、子どもが幼ければ幼い程それは一層切実なものであり、また病気や苦しみの時、障害を負っている場合はなおさら必要です。」(「家庭」26番)

家庭は特に生命の賜物を受ける場であり、子供の尊厳が保護と愛情という特別な表現によって確認さ

れる所でもあります。とりわけ、より弱い立場にある子供たちの場合は、家庭こそが最も効果的に子供たちの尊厳、健常児と同等の尊厳を守ることができる場です。このような状況にある家庭は複雑な問題に直面することは明らかです。そしてその問題に対する援助を受けるのは当然のことです。そこで重要になるのが、近くにいる人、友人、医者、ソーシャル・ワーカーです。両親は周囲の助けによって、このとても安易とは言い難い生活を直視するよう励まされなければなりません。自分たちだけで孤立するようなことがあってはならないのです。近い親類だけでなく適当な人々や友人と、問題を共に考えることが大切です。

(….) キリストはいつも病人や苦しんでいる人々に親しく近づき慰めをお与えになりました。教会は現代の「よいサマリア人」に感謝しています。いつでもどこでも苦しみを和らげるために「来る日も来

る日も捧げる奉仕、つまり人々を受け入れる心、犠牲、無私で行なう世話」に最善を尽くす人々だからです。（「いのちの福音」27番）

3 不利な立場にいる子供が、喜んで受け入れられる環境で生活することができれば、子供は孤独ではなく社会の中心に居ることを感じます。そして、人生はどんな時でも生きるに価するということがわかるでしょう。親の方も人間的キリスト教的連帯の価値に触れることとなります。他の機会に思い出したように、行動で示すことが大切です。病気は克服できない障害など生み出さないこと、病気は病人と本当のキリスト教的愛情との関わりを妨げないことを行動で示すのです。病気と聞いてすぐに意識すべき心構えは、様々な状況にいる貧しい人々こそ、天の国を引き継ぐということです。

社会的弱者を歓迎することは文明のしるし

今考えていることは、多くの親が示す子供への並外れた献身です。たくさん家族が率先して里親になり養子にするため寛大な熱意をもって喜んで障害児を迎えていることが思い出されます。（・・・）これは障害児を重荷だとみなしたり最後まで生命の賜物を生き抜く価値がないなどと考える人々に対して最もふさわしい答えです。最も弱い者を迎え、その旅路に手を貸すことは文明のしるしなのです。

4 司教や司祭は親である人々を助ける任務があります。両親が理解し受け入れるべきなのは、たとえ苦しみや病気を背負っていたとしても生命は常に神の賜物であるということです。全ての人は基本的権利を有しています。奪うことも、犯すこともできない不可分の権利です。全ての人ですから、障害を持つ人々ももちろん例外ではありません。障害者はその不利な状況のために、権利を行使しようとする時大きな困難に直面するでしょう。障害者を一人にしてはなりません。社会はこのような人々を喜んで迎え、個人の可能性に応じて社会との結び付きを促し、社会の一員として受け入れるべきです。

人間一人ひとりについて言えることは、人間としてのその尊厳によって、常に最大限の尊敬を受ける価値があるということです。（・・・）障害者は、その他の弱い立場に居る人々と同様、自らの人生に責任を持てるよう励まされなければなりません。それは家族の仕事です。初めの動揺を克服したら、まず第一に生命の価値を本当に理解しなければなりません。このことがわからなければ、どんなに頑張っ

ても期待される治療や回復を得られない時、失望と落胆の危険にさらされることとなります。

5 家族は社会から適切な援助を受ける必要があります。ある時には深刻な事態において、応急手当が必要となります。また時には、家庭で生活することができなくなった障害児のために、良く組織され、十分に設備の整った社会的な施設が必要な場合もあります。

どんな場合でも、絶え間なく定期的に家族と触れ合うことが大切です。良く知られているように、話すことや聞くこと、つまり対話が重要な要因となつて、統制と調和のとれた行動ができるようになります。障害児が、自分に関心や愛情が向かっていると感じられることも必要です。この役割を果たす者として、家族を欠くことはできません。けれども、家族だけで充分なことをするのは難しいでしょう。家族以外では専門機関やその他の援助形態がこの役割を担っています。こういった機関は、障害児の対話のために相手を確保し、親しみのある有益な関係を築いてくれます。

問題を抱える家族にとって祈りは最大の拠り所

集団生活や友情は、状況を改善し個人的にも社会的にもより良く順応するようになるための素晴らしい条件です。これは受け入れ体制や満足の行く関係によって果たされます。

6 兄弟姉妹の皆さんと一緒に、現実的な問題として、家庭や社会の中で障害児を受け入れる大切さについて考えました。多くの人がこの問題について記してきました。司牧的活動はこのことに大きな関心を寄せなければなりません。子供たちはあらゆる配慮を受ける権利を持っていますが、困難な状況にいる場合は特にそうです。

信仰者にとって大切なことは、謙遜と委託の心で神に信頼することです。何よりもまず有益で科学的な調査を行ない、あらゆる社会的教育的な工夫に率先して取り組むことは大切ですが、それにもまして祈りによって家族は困難に直面するための力を得ることができるでしょう。絶えず神に向かうことによって、家族は苦しみを担っている子供を迎え愛し感謝する方法を知りましょう。

希望の御母であるマリアがそのような状況に居る人々を支えてくれますように。皆さんの素晴らしい献身をマリアに委ねます。皆さんと皆さんの愛する人々に祝福がありますように。（1999.12.4）

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円（税込）

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

* 電話受付時間は月・木・金曜日午前10：00～12：00、水曜日午前10：00～午後5：00となっています。

赦しの秘跡

〔「カトリック教会カテキズム」より(試訳)〕

IV 内的な悔悛

1430 すでに旧約の預言者たちもそうであったが、イエスの改心への呼びかけは、まず第一に、「粗布と灰」、断食と犠牲といった外に現れる行為ではなく、心の改心、内的悔悛を目指していた。それなしには、悔い改めの業は実りを結ばず、偽善的なものである。反対に、内的改心があれば、人はその目に見える表現である悔い改めの行為や業に励むようになる(ヨエル2・12-13; イザヤ1・16-17; マテオ6・1-6,16-18参照)。

1431 内的な悔悛とは、全生活の方向を根本から変えることであって、それは、心をつくして悔い改めて神に戻ることに、罪との決別、悪を忌み嫌うこと、犯した悪行への憎しみを伴う。同時に、神の慈悲と恩恵の助けに希望と信頼を置きながら、生活を改める望みと決心を含む。この改心は、教父たちが「靈魂の苦惱」(animi cruciatus)とか「心の悔悛」(compunctio cordis)と呼ぶ健全な痛みと悲しみを伴う(トリエント公会議: D.S.1676-1678; ローマ公教要理、2.5.4参照)。

1432 人の心は粗雑で堅くなっている。神から新しい心(エゼキエル、36・26-27参照)をいただくことが必要である。改心は、まず私たちの心をご自分に立ち返らせる神の恩恵の業である。「主よ、御もとに立ち帰らせてください。わたしたちは立ち帰ります」(哀歌5・21)。再び始める力を私たちにお与えになるのは神である。神の愛の偉大さを悟ったとき、私たちの心は罪の忌まわしさと重みを知って震え、罪によって神を侮辱し神から離れることに恐れを感じ始める。人間の心は、私たちの罪が貫いたお方(ヨハネ19・37; ザカリア12・10参照)を見ながら、改心するのである。

キリストの血から目を離さないようにしよう。そうすれば、それが御父にどれほどの価値を持つかが分かる。なぜなら、その血は私たちの救いのために流され、全世界のために痛悔の恵みを勝ち得たのだから。(ローマの聖クレメンテ、Epistola ad Corinthios,7,4)。

1433 復活の後、聖霊は「罪について世の過ちを明らかにする」(ヨハネ16・8-9)、すなわち、御父がお送りになったお方をこの世が信じなかったことを明らかにする。しかし、罪をあばく聖霊は、同時に慰め主(ヨハネ15・26参照)であって、人の心に痛悔と改心の念を起ささせるのである(使徒行録2・36-38; ヨハネ・パウロ2世回勅Dominum et vivificantem,1986,27-48参照)。(1434~1470省略)

X 免償

1471 教会が教えまた実行している免償は、赦しの秘跡の効果と深い関係がある。

免償とは何か

「免償とは、罪科としてはすでに赦された罪に対する有限の罰を、神の前においてゆるすことである。キリスト信者は、ふさわしい心構えを有し、一定の条件を果たすとき、教会の介入によって、免償を獲得する。教会は救いの奉仕者として、キリスト及び諸聖人のいさおしの宝を権威をもって分配し付与する。」

「免償には部分免償と全免償があるが、それは、罪のために負わされる有限の罰からの解放が部分的であるか、全体的であるかによる。」

「すべての信者は、部分免償または全免償を自己自身のために受けるか、あるいは代祷の様式で死者に譲ることができる。」(『新教会法典』、992~994条)。

罪の罰

1472 この免償についての教会の教えと実践を理解するためには、罪が2種類の結果をもたらすことを思い出すことが肝要である。大罪は、私たちから神との交わりを取り去り、その結果人は永遠の命に入る資格を失うが、この喪失を罪の「永遠の罰」と呼ぶ。他方、すべての罪は、たとえ小罪であっても、被造物への無秩序な執着を伴い、それから浄化される必要が生じるが、この浄化は、この世でなされるか、さもなければ死後に煉獄と呼ばれるところでなされる。この浄化によって、人は罪の「有限の罰」と呼ばれるものから解放される。これらの二種類の罰は、神によって外から課されるなにか復讐のようなものではなく、むしろ罪の本質自体から生まれるものである、と考えるべきである。もし人が熱烈な神への愛によって改心したならば、その愛によってすべての罰が浄化され、有限の罰が残らない可能性もある(トリエント公会議:「カトリック教会公文書資料集」1712-1713;1820参照)。

1473 罪が赦され神との交わりが回復されるとき、罪の永遠の罰も赦される。しかしながら、罪の有限の罰は残る。キリスト信者は、あらゆる種類の苦しみと試練を忍耐をもって耐え、その時が来たら平静沈着に死に立ち向かうことによって、これらの罪の有限の罰を恩恵として受け入れなければならない。祈りと様々な償いの実行とともに慈善と愛徳の業を通して、「古い人」を完全に脱ぎ捨て、「新しい人」を着るように(エフェソ4・24参照)努めなければならない。

諸聖徒の交わり

1474 信者は、罪から清められ神の恩恵の助けを得て完徳を目指そうと努力するとき、ひとりぼっちではない。「神の子の一人一人の生活は、キリストにおいてキリストによって、他のすべての信者の兄弟の

生活と、感嘆すべき仕方と結び付いている。神の子たちは、こうしてちょうど神秘的な人格を形成するように、キリストの神秘体の超自然的な一致を形作っている。」(パウロ6世 Const.ap. "Indulgentiarum doctrina",5)。

1475 それゆえ諸聖徒の交わりによって「天国の聖人たちと、煉獄で清めを受けている靈魂たちとまだこの世で巡礼を続けている信者との間に、絶えず愛の絆とあらゆる善のふんだんな交流が存在している(パウロ6世、前掲書)。この感嘆すべき善の交流によって、ひとりの信者の聖性は他の信者に善い影響を及ぼし、それはひとりの罪が他の信者に与える害を凌駕する。それゆえ、罪を悔いた罪人は、諸聖徒の交わりに助けを求めるなら、犯した罪の罰からより早くより効果的に清められるであろう。

1476 諸聖徒の交わりから生まれる霊的善は、教会の宝庫とも呼ばれる。この宝庫は、「何世紀にもわたって積み上げられて来た物質的な財産とは違って、財産の総和ではなく、神のみ前で汲み尽くすことのできない無限の価値をもつ私たちの主キリストの償いと功德である。それは、キリストが人間が罪から解放され御父との交わりに至るようにと捧げられた償いと功德である。人類の贖いの功德と罪の赦しは、我らの贖い主キリストにおいてのみ、あふれんばかりに見いだすことができる(ヘブライ7・13-15;9・11-28参照)。」(前掲書)。

1477 「この宝庫には、至聖なる処女マリアとすべての聖人たちの祈りと善行も含まれる。それらは、神のみ前で真に巨大で、測ることができず、常に新しい価値をもっている。聖人たちは、キリストの生活に従いながら、その恩恵によって自らを聖化し、御父に喜ばれる行いを実行し、その結果自己の救いを図りつつ、キリストの神秘体の一致の中で、兄弟たちの救いにも同様に協力するのである。」(前掲書)。

XI 赦しの秘跡の執行

1480 すべての秘跡と同じく、赦しの秘跡も典礼行為である。普通はその儀式は次の要素からなる。つまり、まず司祭のあいさつと祝福、良心を照らし痛悔を起こさせるための神のみ言葉の朗読、罪の痛悔への励まし、罪を認め司祭に表明する告白、償いを授受、司祭による赦しの宣言、感謝と賛美の祈り、そして司祭の祝福を受けて退去することである。

1481 ビザンツ典礼では、赦しの言葉は祈願の形で言われる。それは、赦しの神秘を感嘆すべき仕方と表現している。「神は、ダビデが彼の罪を告白したとき預言者ナタンを通じてお赦しになりました。ペトロが激しく泣いたとき、あの罪女が主の御足

に涙をこぼしたとき、彼らをお赦しになりました。またあのファリサイ人も、あの放蕩息子もお赦しになりました。この同じ神が、罪人である私を通じて、あなたをこの世においてもあの世においてもお赦しになり、恐るべき審判のとき罪をお責めになりませんように。神は世々に祝せられるお方。アーメン。」

1482 赦しの秘跡は、また共同告解の形でも挙行することができる。この形式では、告白者が告白の準備と罪の赦しを受けた後での感謝を共同で行う。このようにして、個人的に行われる罪の告白と赦しが、朗読と説教、共同の指導の下で行われる良心の究明、皆で捧げる赦しの祈願、主祷文の祈りと感謝の行為とともに、神のみ言葉の典礼の中に組み入れられる。この共同の挙行は、償いの教会的性格をさらに明白に表現する。いずれにしても、その挙行の仕方がいかなるものであろうと、赦しの秘跡は、その本性上、常に典礼行為であり、それゆえ教会的であり公のものである(典礼憲章26-27参照)。

1483 重大な必要性がある場合、集団的告白と赦しによる共同告解が可能である。ここで言う重大な必要性とは、死の危険が迫り1名の司祭または複数の司祭であっても一人一人の告白を聴く時間の余裕がない場合を言う。また、このほかにも、赦しの秘跡を受ける者の数に比して、聴罪司祭が不足し、適当な時間内に個別告白をふさわしく聴くことができないために、赦しの秘跡を受ける者が自己の落ち度なしに秘跡の恩恵又は聖体拝領から長期にわたって遠ざかることを余儀なくされる場合も、それに該当する。この場合の赦しの秘跡が有効であるためには、告白者は適切な時に罪を個人的に告白する決心をもたねばならない(『新教会法典』962条1項)。祝祭日又は巡礼の機会に生じるような、単に著しい数の信者が集合するということは、その本性上、ここで言う重大な必要性とは見なされない。

1484 「個人的に十全な形で罪を告白し赦しを受けることが、信者が神と教会と和解するために必要な通常の唯一の手段であるが、實際上又は社会通念上不可能である場合はこの限りではない。」(Ordo poenitentiae,31。『新教会法典』960条1項も参照)。この事実は次の深遠な理由による。キリストはそれぞれの秘跡の中で働かれるが、赦しの秘跡の中で、キリストは個人的に一人一人の罪人に「息子よ、あなたの罪は赦された」(マルコ2・5)とおっしゃられる。キリストは、ご自分を必要とする病人を治すために、一人一人の病人の上に近づかれる(マルコ2・17)医師であり、彼の健康を回復し、教会の交わりに再びお招きになるのである。それゆえ、赦しの秘跡は、神と教会との和解を最も完全に意味する方法なのである。(1478~1479省略)